

<県研究主題>

コミュニケーション能力の素地を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 林 幸果(湘南三浦地区)

<研究主題>

どの子ども楽しめる外国語活動の授業作りをめざして

1 提案内容

(1) 実践に向けての課題意識

「外国語（英語）を嫌いにさせないこと」、「楽しいなと子どもが思ってくれるような活動にすること」に気をつけながら、基本的には、学級担任が年間計画に基づいて授業の内容、構成を考え、それを国際教育指導助手（IEA）に伝え、必要に応じて協力を得ながら指導を行っている。今回の実践でも子どもたちが興味をもって取り組むことができ、知的好奇心をくすぐることができるような内容を考えて、取り組んだ。

(2) 実践上の工夫（日々の授業作りで大切にしていることや具体的な手立て）

① 年間指導計画の作成

子どもたちの関心に合うテーマを高学年の担任で話し合い、内容が2年間で重複しないように考えて作成している。

② 「聞く力」を育てる

教員は子どもが聞き取ることができる言葉や単語を選び、英語をできる限り使って授業を行うようにしている。「聞き取ることができて楽しかった」という体験をたくさん増やして、「英語がわかる！楽しい！」という思いを子どもたちがもつことにつながっている。

③ 教材研究

子どもたちに何を学んでほしいかを考え、それに合わせて内容を考えて授業づくりをしている。今回の実践では、「体の部位」をテーマに人の骨を使って活動を考えた。外国語だけでなく、理科など他教科との関連もできる。英語で授業を行うために、毎回スクリプト（台本）を作って行った。

④ ふり返りカードの活用

授業についてわかったことや気付いたこと、友達のがんばりなどを記入することで、その授業で英語や内容を捉えているか把握したり、見ているだけでは分からない子どもたち同士のつながりを知ったりすることができた。

(3) 実践の成果（○）と課題（●）

○ただ外国語を学ぶのではなく、「聞いてよかった」「取り組んでよかった」と思えるような内容を取り入れたことで、子どもたちが興味をもって取り組むことができた。

○担任が英語を駆使して授業を行うことで、英語がより身近になり、授業以外でも自分でも使ってみようという気になった子どもが出てきた。

●骨を数える活動なのか、Body parts を教える内容なのかははっきりしなかった。テーマをしっかりと教員側が把握し、ねらいを定めて組み立てる必要があった。

●しっかり計画を立て、子どもたちに正しい英語を聞かせること。子どもに間違った英

語表現を伝えないためにも、IEA と事前の打ち合わせを十分に行い、確認をする必要性がある。

- 中学では、文字学習が必要だと卒業生へのインタビューで分かった。文字を書かせなくても、見せることを意識して授業を組み立てる必要性がある。

2 協議内容

＜子どもに興味をもたせる教材および授業作りの工夫について＞

(1) Q: 知的好奇心をくすぐるための工夫で、子どもたちにうけがよかったものはあるか。

A: どの子も知っている色をはじめに教えたい。赤でもいろいろあって、それは英語でも同じ。自分のクラスでは色にどんな名前をつけるかを考える活動をした。

(2) Q: IEA の授業の中での役割分担は、どうしているのか。

A: 打ち合わせの時に分担をする。基本は、担任が進める。ただ、発音の時には、積極的に言ってもらおうようにしている。また、子どもたちとのコミュニケーションを図るためにお楽しみのミニゲームなどをしてもらっている。

(3) Q: 外国語活動を通しての子どもたちのコミュニケーションで、クラスの様子が変わったところはあるか。

A: 指導要領にあるコミュニケーション能力の素地を育成していくために、答えのないことを真剣に話し合ったり、グループで話し合ったりする活動を取り入れている。自分の言いたいことを伝えたり、相手が何を言っているのかをキャッチできたりする力を35時間の外国語活動を通して育てたい。

(4) Q: ピクチャーカードなどの教材作りは、どうしているのか。

A: 教材の構成は、担任が考える。教材作成は、IEA がやってくれる。必要な教材作製もお願いしている。

3 まとめ（助言）

- ・ 今までの英語教育では、英語は完璧ではなくてはいけないという思いがあったのではないか。英語を身に付けたいというモチベーションが大事である。
- ・ 知的好奇心に訴えるような授業を考えていくことが、外国語を身に付ける上でも有効である。
- ・ 子どもたちの実態がよく分かっている小学校の教員が行うことはとても有効である。
- ・ 小学校の教員には、子どもたちが英語を嫌いにならない、学ぼうという意欲をもたせられるようにすることを大事にしてほしい。
- ・ 学びたいという思いをもたせ、意味のある場面で使うことができるようにしてほしい。

＜研究主題＞

外国語活動を通して、児童が自ら関わろうとする態度の育成
～キャンプに向けてクラスの旗を作ろう～

1 提案内容

(1) テーマ設定

保護者や児童からの不安の声をもとに、学習意欲の喚起、チャレンジすることへの抵抗の払拭のための手立てとして、児童が参加しやすい状況の設定を考えた。自分が関わらなければ先へ進めないという気持ちを持たせるために、5年生のメインイベント「キャンプ」に関連づけて、児童が主体的に参加しやすい状況を設定し、コミュニケーション活動を工夫した。

(2) 研究の実践

単元名を「キャンプに向けて、クラスの旗をつくろう」、単元目標を「グループの中で好きな色、形を伝え合い、協力し合ってクラスの旗を考えながらコミュニケーションを図る」として実践を行った。

2 協議内容

(1) Q：児童が英語をうまく使いたいと思う実践。振り返りシートの有効性を感じた。

チェック欄を児童がつけて、誰が貼るのか。

A：児童がレーダーチャートに貼っている。

(2) レーダーチャートは、徐々によりよい方向にいくと思うが、見えない力が働いて外に貼らなきゃいけなくなる可能性がないだろうか。先生から認められるだけでよいのではないか。使いどころを考える必要がある。

(3) Q：色や形に親しむことと、キャンプに向かっていこうということの2つの要素を合体させたことでの作用はどうだったか。

A：児童が、何事も担任を中心にして進めている状況を変えたいという点や活動をプレッシャーを感じずに楽しみながらできるようにしたいという点から取り組むことにした。外国語に慣れ親しみながら、クラスづくりをすることができたと思う。

(4) Q1：子ども像の記述があるが、今回どうなっていればよかったのか。また、実際の子ども達とのギャップはあったか。

A1：担任の押しつけにならないように、児童にプレッシャーを与えるような「覚えろ」「言え」という意味合いの言葉を使わないように心がけた。「言ってみよう」「ジェスチャーでもいいよ」などの声かけをした。

Q2：めざす子ども像に近づけない児童や配慮が必要な児童に関してどうだったか。

A2：支援級の児童に、外国語活動の得意な児童が声をかけたことをきっかけに、その他の児童も巻き込みながら指導を行った。その結果、支援級の児童の成長を共に喜ぶ姿が見られた。

(5) Q：提示されている表以外にもクラスルームイングリッシュはあるか。児童は持っているか。今後の見通しはあるか。

A：今回、取り入れたことで他の教科にも応用できると考えている。アドバイスを受けて、表をジェスチャー付きで作成し、掲示することを考えている。

3 助言

- (1) 中身のある活動・学習内容にすることが大切。何につながるのか。何が見えるのか。今回の活動では、旗のデザインとして星が書いてあるから、「星が好きですか」と聞く。そこには必然性がある。日本語の会話でしているように自然な話として組み込んでいくことができる。担任が授業の内容を作っていくことの意味はそこにある。
- (2) 外国語活動の中でも言語活動を充実させていくことについて、たくさんの単語や文型を知っていることが、話せるということにはならない。限られた中で、いかに自分のことを伝え、相手から受け取るのかを大切にしていく。
- (3) クラスルームイングリッシュについて。日本語で、「ほめられる」「認められる」ことに慣れていないことがある。英語の場合、おおげさに表現することが多いので、ほめられる経験をするチャンスとしてとらえて活用するようにしたい。

4 グループ協議

子どもが主体的に取り組む外国語活動の工夫

- ・必然性について話し合った。コミュニケーションへの姿勢や相手意識を持つことが大切。地域の実態を考慮して取り組んでいく。
- ・動機付けの大切さについて話し合った。他教科へつなげられる設定は有効。例えば提案の中の骨と理科の関連など。
- ・コミュニケーションを中心には、どういうことかについて話し合った。子ども同士が話すことなのか、教員と話すのか。また、話すことも受けることもコミュニケーションであるということの確認もした。
- ・子ども達がしたくなるような活動、英語を言いたくなるような活動を授業設計していくことが大切。どのように日常とマッチングさせていくかを考えることも大切。
- ・外国語を通した学級づくりについて。子どもたちの思いが叶ったという形にしながら、教員が題材を提示していくことが大切。
- ・地域ごとの取組の違いについて。低・中学年も実施しているかいらないか。また、ALTの配置状況についての情報交換をした。
- ・活動例の情報交換を行った。例1：関心を持たせるための活動として、オリンピックのメダルの数ランキングや海外旅行の写真を示す。例2：6年生が絵本を練習して、1年生に読み聞かせをする。例3：レストランゲームなど、いろいろなアイデアが出された。
- ・各地域での取組の情報交換をした。そこから、担任がすすめることの効果について話し合った。また、発音や言い方の正確さなどについては、やはりALTは必要だということが出された。

5 まとめ

- (1) 文部科学省小学校各教科等指導主事連絡協議会の行政説明より
今後の動向について、など。
- (2) 県教育委員会より
 - ① 間違いが許される環境作り。
 - ② fun から interesting へ。
 - ③ 児童の成長を信じて授業を展開。
 - ④ 児童に授業を創らせるという意識。